

出逢い(仮)

kill me

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ねえ、私達が大人になれたらー」。

※この作品では登場人物の紹介はしません。読んだら何となく人物像が見えるようになるようにしているつもりです。ご了承ください。

目次

始まり	1
初めまして…？	3
記憶消失の疑い	6
知らぬが仏	9
手がかり発見か？	12
お泊まり ?!?!?!?	15

始まり

「ねえ、私達が大人になれたらー！ー！ー」

……ああ、またこの夢か。…胸糞悪い…。

いつまでこの訳の分かんねー夢見りや済むんだよ…。

つか今何時…！？

…もう8時じゃねーかよ、くそつたれが。

………学校行くか。

さてと、着いた着いた。時間はー…見なかったことにしよう。そう
だそうしよう。そうだそれが良い。

今誰の授業だろ、ドア開ける前に覗いてみるか。

………うわぁ…最悪だ…。へびかよ…。

へびの本名は上松明彦。あだ名の理由は2つあって、1つ目は顔が
へびみたい。もう1つ目は、生徒指導の先生でとにかくしつこい。
1ヶ月前の事でも掘り返してくる嫌な奴。…入りたく無くねー…。
つつてもしやーないか。

「…おはぎーす。」

「ん？おやおや、滝野くんおはよう。来て早々で悪いんだが今何時何
分かな？」

「ええつと…10時50分ですね。」

「ふむ…。時計は読めるようだね。」

………うぜえ…。

「では次の質問だ。この学校の登校時間はいつまでかな？」

「8時半までつす。」

「つまり君は、2時間20分も来るのが遅れたことになるね？」

…マジでこいつうぜえな。

「ずいぶんと重役出勤だね〜？きつと僕のような凡人には思いつかないような事があつたんだらうね〜？ぜひ理由を聞かせてもらいたいね〜？」

………死んでくんねーかな、こいつ。

「ん？どうしたんだい滝野くん？早く理由を凡人の僕に聞かせてくれよう。」

…チツ。

「ああ〜…。ただの寝坊です。」

「ん〜？聞き間違いかな〜？今僕の耳には聞こえたことをその通りに受け止めると、君はただの寝坊で学校に遅れたことになるんだが？」

「…その通りつす。」

「滝野くんはよほど夜に忙しいようだね〜。なんせ今日で3日連続だもんね〜？」

…こいつの笑ってる顔マジでキモい。

「…あははっ。」

…ん？笑い声？あのキモヘビの声じゃねーしクラスの奴らはもう見飽きて自習してるし。

「授業中失礼しますよ、上松先生。」

「ん？どうしましたか教頭先生。」

この人は教頭の吉田。人の弱みにつけこむクズと違って、生徒の話をしっかり聞いてくれる優しい先生だ。

「例の転校生か学校に着いたのですね。確かこのクラスでしたよね？」

「ええ、このクラスですね。名簿にも書かれています。」

転校生？今日は5月18日。転校の時期とは、ずれてるんじゃないかねーの？

「ほら、君ももう座りなさい。」

………こいついつか絶対潰してやる。

「ええっと、じゃあ名前と一言言ってくれるかな？」

「はい。緒方紗彩です。よろしくお願いします！」

初めまして…？

何でだろ。聞いたこと無いのに懐かしく思えんのは。

「じゃあ席は…滝野くん隣の隣だね。まあ分らないことは滝野くんが何でも優しく教えてくれるだろうから。」

今、何でも優しく、に悪意を感じたのは俺だけか？

「よろしくね、滝野くん。」

「こちらこそよろしく緒方さん。」

何でだろう。初めてな気がしない。

「ねえ、緒方さん。俺らって会ったことないよね？」

「おやおや、滝野くん。君は授業中にナンパかね？つくづく良いご身分だね。」

…ガチでこいつの絡みうぜえよ、くそが。

「そんなんじゃないっすよ。ただ何か聞いたことある気がするんで聞いただけです。」

「ええつと…。滝野くんの名前つてもしかして涼？」

…俺名前言つてないよな？

「そうだよ、滝野涼。」

「もしかして昔アメリカに住んでた？」

…何で誰にも言つてないことを…。

「え?!滝野マジかよ!？」

…ここで肯定すると面倒くせえな。

「そんな訳ねーよ。…ただの勘違いかな。ごめんね緒方さん」

「大丈夫だよ。…こつちも人違いだったみたいだし。」

「じゃあ授業再開するぞ。」

～授業中～

「じゃあこれで授業終わります。」

『ありがとうございます。』

ああだるかった。キモヘビの野郎、俺にばっか絡みやがって…。マジ死なねーかな…。

「滝野くん、ちよつと良いかな?」

「どうかしたの?」

「ここでは言いづらいから…どこか静かな場所無いかな?」

転校そうそう俺に聞くことなんてあんのか?つか何で周りこんなうっせーの?

「じゃあ昼休みに屋上とかでどう?」

「分かった。じゃあ、昼休みね!」

…?何だったんだ?全然分かんねー。

「おい、涼!!お前リア充になつたら絶交だかな!!」

…こいつは何急にほざいてんだ?つか絶交とか今時小学生でも使わねーぞ…。

「おい、広樹、てめえは何騒いでんだ。」

何か騒ぐような場面あつたか?

「だってよお!転校生、帰国子女、超美人の最強三拍子が揃ってる子と昼休み二人きりだぞ!!こんな最高のシチュエーションそうそう無いぞ、この野郎!!」

「広樹、うるさい。もうちよつと静かに話せないの?」

おつ、まともなのが残ってたか。

「う、うるせえよ、かれん!!お前は気になんねーのかよ!?!あの女っ気0の涼に!彼女が出来るかも知んねーんだぞ!?!」

「大きなお世話だ!!」

「確かに滝野は女っ気0だけど…。」

「おいこら、勝山。」

「でも、詮索は駄目でしょ。」

…こいつらが無駄に大きな声で話すから、周りがまたざわついているし…。うぜえ。

「つか!!何で緒方さんが俺に告ることになってんだよ!!そっからだらうが!!」

『1%くらいは可能性ある!!』

… (怒)

「上等だゴラア!!!今言った奴全員ブツ殺してやらあ!!!」

「やっべ、涼が切れた。」

…もう我慢できねー(怒)。

「授業始まるから席つけー!」

…ちっ、タイミングの悪い。

「?何してるんだい、滝野くん。早く席につきなさい。」

「…うっす。」

↳授業中↳

…やっつと四限終わった…。ああ…くそへびのせいで体力が…。

「おい、涼!ちゃんと結果聞かせろよ!」

「しつけーんだよ、てめえは!!!いい加減にしないとまじでぶん殴んぞ!!」

「だつて気になんじやん!!」

…もういいや…。このアホ相手にしてたらキリがねー…。さつさと屋上行こつと…。

↳少年移動中↳

ええつと緒方さんは…いた。音楽聞してるみたいだけど、声かけて良いのか?

「〜♪」

…めっちゃ音楽にノつてて声かけづれ…

「ん?あつ、滝野くん!!」

あ、良かった、気づいてくれた。

「ごめんね、急に呼び出して。」

「全然大丈夫だよ。」

内心めっちゃ焦ってるけど黙つとこう。

「それで話って何なの?」

「ええつとね…滝野くんって本当はアメリカに住んでたよね?」

記憶消失の疑い

「…えっ?」

「さつきは住んでたこと無いって言ってたけど、あれ嘘だよな?」

「…何で嘘だと思うの?」

…自分では上手く誤魔化したつもりだ。そこまで分かりやすくも無かったと思うんだけど。

「簡単だよ。私が涼くんのことを覚えてるから。涼くんは私のこと覚えて無い…?」

「……………」

緒方紗彩。どこかで聞いたことある名前。だけども思い出せない。何でだ…?…そもそも俺はいつ頃アメリカに住んでた?いつ日本に戻った?どんなところに住んでた?…あれ…?…俺はアメリカでどんな生活をしてた…?…

「…ごめん。アメリカに住んでないって言ったのは嘘。俺はアメリカに昔住んでた。…だけど、紗彩のことは覚えて無いんだ…。」

…えっ?…あれ?俺は今自分で何て言った?

「でも、今涼くん私のこと紗彩って…!!」

…やっぱり。今俺は、緒方さんのことを紗彩って呼んだ。会ったのは今日が初めてのはずなのに。…初めてのはず…なの…に…?…

「…涼くん?…何で泣いてるの…?…」

「…あれ?…俺…何で泣いてんだ…?…」

何でだ?俺自身のことなのに俺自身が分かんねー。何で俺は泣いてんだ?何で俺は初めてあったはずの女子を名前で呼んだ?何でこの子は俺のことを知ってる?アメリカで会ったからか?そもそもどういう経緯でアメリカに行った?どういう理由で日本に戻ってきた?つかいつ行っていつ戻ってきた?いつから広樹や勝山と仲良くなった?アメリカに住んでたあたりの記憶を忘れてる…?…何でだ…!?

…思い出せない…。

「……………んー!」

…何で思い出せないんだ…!?

「りよ…くん!」

…何でだ…!?!…何で…。

「涼くん!!!」

…あつ…。

「…大丈夫? 顔色悪いよ?」

「ごめん、大丈夫。…そろそろ5限始まるし教室に戻ろう。」

「……………」

「どうしたの?」

「…ううん、何でも無いよ。先戻ってるね。」

「分かった。」

何でだろ、全然昔のことが思い出せねー。昔の俺のことを知ってる人は…あー…。いたな。ま、とりあえず俺も教室戻っか。

～少年移動中～

～授業中～

あー…やつと終わった…。まあこれで学校終わったし、帰るか…。

「涼ー!!! てめえ帰ろうったってそうはいかねーぞ!!! 昼休みのこと白状するまで帰さねー!!!」

ちつ。めんどいのに捕まった。

「おい広樹。確認したいことあるからさっさと帰りてーんだよ。明日にしてくれよ。」

俺のアメリカ時代についてさっさと調べてーのに…。まあ、反応は…。

「んな言い訳聞かわけねーだろうがあ!!!」

デスヨネ、ウン、シツテタ。(白目)

「で?! 緒方さんに何て告られた!?!」

…さあて何て言うかな。正直に言っても信じないだろうし、第一俺自身が言いたくない。んく…?…こいつらが信じる嘘か…。

「ねえ滝野くん、一緒に帰ろ!」

『なっ…!?!』

…えっ？

『涼ー!!! (怒)』

「ええつと…まあ、そういうわけだから俺は帰る。じゃあ、また明日な。」

『てめえ覚えとけよ!!! (怒)』

おお、怖い怖い。

「じゃあ行こっか。」

「うん!…そういえば涼くんどこに住んでるの?」

あつ…。

「とりあえず、外出よ。なっ?」

「ん?まあそうだね。」

さっさと逃げねーとめんどいことだ…。

「りよ、涼くん…だと…?」

『涼てめえ明日絶対にぶっ殺す!!! (怒)』

知らぬが仏

ああ〜明日学校行きたくねー…。

「ごめんね、皆の前で涼くんって呼んで…。」

「いや、大丈夫だよ。どうせあの馬鹿共はどうなっても騒ぎやがるし。」

…気乗りしないけど疑問解消させるか。

「ねえ緒方さん、聞きたいことがあるんだけど良いかな？」

「二人っきりの時は紗彩で良いよ。昼も私のこと紗彩って呼んでたし。」

「いやでも…。初対面の女子を名前で呼ぶってのは…。」

…つか普通に恥ずかしいし。

「あははははっ！涼くん純粹だねっ！」

「え!?!いやただ女子慣れしてないだけだし、全然純粹じゃないよ。」

…全然純粹じゃないって何だよ…。我ながらテンパリすぎだろ…。

「と・に・か・く！私のことは紗彩って呼んでね！」

「いやだから…。」

女子慣れしてねーのにいきなり名前呼びとか無理だし。

「駄目…?？」

うっ…。上目づかいはせこい…。

「分かったよ…。えっと…さ、紗彩。」

「うん！よろしい!!」

もしかして…。いや、もしかしなくてもこれ完全にハマられたな…。

「で、一つ聞きたいことあるんだけど良い？」

「良いよ、私に答えられることなら。」

「俺と紗彩はいつ会ったんだ。」

これなら多分答えてくれるだろ。

「えっとね〜私達が八歳の時だね。」

八歳っていうと九年前か。…駄目だ全然覚えてねー…。

「ええっと…いつ転校したのかは？」

「えっと、涼くんが転校したのが確か…十歳くらいの時だったかな。」
「ってことは、俺がアメリカに住んでたのに二年くらいか。うん、全く覚えてねーな。」

「涼くんさ、こんなことわざ知ってる?」

「ことわざ?」

「知らぬが仏。」

「……………え?」

「知らぬが仏? ちょっと待って、どういうことだ? 何か俺にとって嫌なことがあったってことか? それで記憶が無くなってる? そんな漫画展開マジであんのか?」

「それでどういうこと?」

「そんなこと言われたら逆に気になる。」

「あ、涼くんここ右? 左?」

「え、あ、右だけど。」

「そっか、私左だからここまでだね。じゃあまた明日!」

「…また明日。」

…ちっ、結局聞きたいこと全然聞けなかったな。まあアメリカには住んでた時期が分かったから今日は良しとしよう。

「んー…紗彩…。やっぱり思い出せねーな。けっこう珍しい名前だから一回覚えたら忘れねーと思うんだけどな…。…ん?」

「涼く!!!」

…あーうるせえのが来やがった。…まあ聞きたいことあったからちようど良いか。

「近所迷惑つすよ、吉平さん。」

「ちようどお前が可愛い子といちゃついていたの見つけたからな、隠れて見てたぜ♪」

「本当にこの先輩うつとしいな。」

「つか吉平さんには愛音さんいるじゃないっすか。他の子に目移りして良いんすか…。」

…今から愛音さんに言いつけてやろうか。

「ん? あく心配すんな、つかいるし。」

「はい?」

「愛音く出てきて良いよ。」

「あ、もう良いの? 滝野くんやっほー!」

ガチでいんのかよ!!

「:ちわつす、愛音さん。」

「で? あの子と付き合ってるの? 滝野くんめっちゃ楽しそうに話してたし。」

「涼にもとうとう彼女ができるのか:。お前昔っから女子と話すこと少なかったからなく。一時期ホモじゃねーかって疑ってたしな!」

「あ、私も思ってた。」

「:あ、俺はホモじゃねええ!!」

『で? あの子は彼女なの?』

「違います。つかあの子転校生っすよ? 何で転校初日告らなあかんのですか:。」

「何だよ、転校生狙ってたのかよ、涼も成長したな!」

「しつけーんだよ、あんたも!!」

「やっぱ涼はからかうと楽しいなく。」

...こいつもいつかぶん殴ってるやる。

「滝野くん、嘘は駄目だよ?」

「え? 俺嘘なんてついてませんよ。」

今までの会話で嘘言った覚え無いんだけど。

「だってあの子初対面じゃないじゃん。」

「え?」

「あの子紗彩ちゃんでしょ? 昔、滝野くんとよく遊んでた子じゃん。」

手がかり発見か？

「それ、本当ですか!？」

「やっぱりそうだったのか!？」

「え、あ、うん。てか滝野くん覚えてないの？いつも仲良く遊んでたのに。」

「それ、どれくらい前の話ですか!？」

「どうしたの？そんなに必死になって。何かあったの？」

「え、あ、いやまあちよつと…。」

正直この人達に余計なことと言うと話が一切進まなくなるからな…。

「まあちよつと気になることがあるんすよ…。で、どれくらい前ですか?？」

「…滝野くん怪しいなく…。」

…そうだった…この人めつちや勘鋭いの忘れてた…。どーすっかなあ…。

「…まあ良いや。つてか吉平も覚えてるんじゃないの？紗彩ちゃんのこと。」

「もちろん覚えてるよ。」

「…は?…はあああああ!!？」

吉平さんも知ってんの!?!マジで!?

「ちよ…吉平さんさつき知らないみたいな感じだったじゃないっすか!!」

「別に知らないとは言ってねーぞ?つか俺はあんま覚えてないしなあんま話したこと無かったし」

「確かに吉平はあんま話して無かったね〜。」

「と、とりあえず俺のアメリカ時代について教えてください!!」

「ん〜…。私もそこまではつきり覚えてる訳じゃないんだよね〜。大まかなことしか分からないよ?。」

「それでも良いんで教えてください!」

「えつとじゃあ…まず何年前に住んでたか、だったっけ。あれは…十年前かな。」

…十年前つていうと…七歳か。俺けっこう記憶力ある方なんだけどなく…。駄目だ全然思い出せね…。まあ、とりあえず次だ。

「ええつとじゃあ…。」

…あれ？確か前紗彩に聞いた時は九年前つて言ってたはず…。

「どうしたの？」

「…俺と紗彩が遊んでたのも十年前ですか？」

「ええつとそう…だと思っただけだね…。吉平覚えてる…訳ないよね…。」

「覚えてねーな。つか決めつけんなよ…。」

「でも実際覚えて無かったじゃん。」

「愛音といつ会ったか、いつ告ったか、何て告ったか、なら全部言えるぞ？」

「え…あ…ええつと…／／／」

♪
目の前でリア充がいちゃつてんのみるとぶっ殺したくなるよね

「…帰るか。」

もう二人の世界に入ってるから声かけても無駄だろ。つかこれ以上いちゃつてんのみると本気で刺したくなるし。

少年帰宅中

はあ…やつと家着いた…。

「…ただいま…。」

『お帰りなさい。』

ん？声が重なってる…？一人はまあ母さんだろうけど残りは誰だ？多分二人いるんだろうけど…。まあとりあえず上がるか。

「誰か来てんの？」

「あんたも知ってる子よ。」

俺も知ってる子？

「こんにちは、涼くん。」

「久しぶりだね。」

「…ええつと…？」

「はあ!?あんたまさか覚えてないの!？」

…誰か全然分かんねー…。

「信じらんない!! あんた散々二人と遊んでたでしょ。普通覚えてるわよ?。」

「あ、えつと…すいません。」

「仕方ないよ。会ったの久々だし。」

「最後に会ったの九年前だしね。」

「…ってことはアメリカで…?。」

「うん。じゃあ改めて。久しぶり、涼くん。西川杏美です。」

「じゃああたしもか。えつと九年振りに涼の目の前にいる大川琴実だよ。」

お泊まり

?!?!?!?!?!

「ええつと…とりあえず覚えて無くてごめん……なさい。」

確かに名前は聞いたことがある気がする。

…あくまで「気がする」ってレベルだけ。

「涼、今日は皆泊っていくから。」

「あ、うん。……ん？」

皆？普通2人って言わねーか？

「もしかして他にも泊まる人いる？」

「あれ？言ってなかった？2人のお兄さん達は一緒だつて。」

「…今初めて聞いたけど。」

「多分お兄ちゃん達買い物に行ってるんだと思うけど…遅いね。

ねえ、琴実に連絡きた？」

「ん…まだみたい。…何やってんだかあの馬鹿兄は。」

…大川さんの方は毒舌だな。

西川さんは逆に大人しいっーか冷静っーか…性格真逆なんだな…。

『ただいま。』

「あ、帰ってきたみたいね。」

「お帰りなさい、お兄ちゃん。」

「遅いよ、馬鹿兄貴！」

「連絡しなくて悪かったな。思い出したのがもう家の近くだったから。」

「次からは気を付けてね。」

西川兄妹は兄貴も大人っぽい対応…つか見た目大人か。で、大川兄

妹は…。

「帰ってきて早々馬鹿とはなんだ、アホ！」

「帰る前に連絡しろって言ったでしょ！それ忘れてんだから馬鹿でしよー。」

「それ天斗にも言えるだろうが!!何で俺だけが言われなきやなんねーんだよ!?!」

「天斗さんは良いの!!かっこいいし、杏美のお兄さんだし!!」

…理不尽だ。

「納得いくか、ボケエエエ!!」

「はいはい、そろそろうちのがついていけないからやめてねー。」

『あ…。』

この人ら完全に俺のこと忘れてたな（白目）

「あー…ごめんね涼。見苦しいところ見せて。」

「いや…まあ、大丈夫。」

「久しぶりだな、涼。元気にしてたか？」

「えつ…と、お久しぶりです…?」

「何で疑問形なんだ？」

この人に事実言ったら殺される気が…。

「あ、涼私達のこと覚えて無いんだって。」

…ちよつ、大川さん!?

「覚えてねーだー…?…一回ぶん殴れば思い出すかも知んねーな♪」

…コノヒトイマナンツツタ!?

「何言つてんの、馬鹿兄貴!!」

「丈流…お前もうちよつと平和的に物事を解決しようと思わないのか

…?」

「丈流さん…さすがに殴るのは…。」

「丈流くん、怪我だけはさせないようにね。」

待って、最後だけ何か違うだけど!?

「…ったく。琴実の兄貴の丈流だ。さっさと思い出せよな。」

「つてことは俺のことも覚えて無いかな？」

「…すいません。」

「まあ、そこまで気にしなくて良いよ。俺は杏美の兄貴の天斗。話してたらそのうち思い出すと思うよ。」

「えつと、よろしくお願いします。」

何か質問がある時は西川兄妹にした方が安全そうだな。

大川兄妹は何っーか…危なそう。

「何っつーか…物足りないねーな。」

「物足りないって何がだよ?」

「まあ数年振りに再開したわけだろ？でも1人欠けてるんじゃないかな」

「…もしかして。」

「あの…。」

「あー？何だ？俺らのこと思い出したか？」

「いやそれはまだなんですけど、その欠けてる1人つてももしかして紗彩ですか…？」

「何であいつのことは覚えてて俺らのことは覚えてねーんだよ!!あれか?!好きな子との美しい思い出しかありませんってか!？」

「涼くん、紗彩ちゃんのが好きなの？」

「涼、紗彩は良い選択だと思うよ♪」

「紗彩か、まあお似合いだな。」

「涼、あんた紗彩ちゃんみたいな美人狙ってるの？あんたには高嶺の花よ!!!」

「ちげーよ!!!勝手に話進めんなやああああああ!!!」